

平賀正子教授退任記念特集

—送辭—

小山 亘

—退任記念論文—

平賀正子

主要業績一覧

—献呈論文—

津田ひろみ

送 辞

— 平賀先生と、立教・異文化コミュニケーション研究科での年月のこと —

小山 亘

Masaru KOYAMA

平賀正子先生に初めてお会いしたのは、2002年ごろの西池袋の雑踏のなかで、だったのではないと思う。それに先立ち、初めて平賀先生のご論文を拝読したのは、記号論の叢書の一つに所収された、紀友則の和歌をヤコブソンの詩的機能論を用いて鮮やかに分析してみせたご論考を、シカゴ大学の図書館で発見し、その独自性に強く惹かれたのをはっきりと記憶しているので、私がハイパークにいた頃、つまりは1996年か、その辺りだったのだろう。2003年4月に、ようやく博士論文を書き上げ、立教・異文化コミュニケーション研究科に着任した私は、その時より、すでに15年近くに亘り、平賀先生とは、この小さな組織の同僚として共に生きてきた。

着任時、38歳の若輩者であった私は、すでに50を超え、もはや若手研究者とは言えない歳となっている。指導・教育、運営業務、研究、私事に追われるうちに、年月が走り去り、私なりに、悲しみや諦め、驚きや憤懣、表わしがたい思いを積むこともあり、そのようにして、一定の「成熟」を強られる経験を重ねたわけである。歳をとるとはそういうことなのだろうとは思いますが、その只中であっては、啞然とし、やがては吐き気がするような感覚だけがゆっくりと堆積していくかのごとき日々がただただ早く過ぎ去ることを切望する、といった状況に甘んじることなども時にはあった。

そのような時にも、あるいはそのような時にこそ、平賀先生は、私にとっての一個の指針、衷心から信頼するに足る人、先達として傍らにいて、時には厳しく、常に暖かく見守ってくださり、私なりの仕方で、大学人としていかにあるべきかを、隣人として行いによって教えていただいた恩人である。今さらながらではあるが、ここに感謝の念を記したい。

一人の人間、あるいは大学人としてだけでなく学者、とくに言語学者としても、平賀先生は私にとっては掛け替えのない先達である。1980年代後半に至って言語学を志すことになった私の体験した時代は、私よりは一世代年長の平賀先生の経験なされた時代と一部、重複している。20世紀末に私が体験した時代は、形式文法、いわゆる構造主義に代表される「言語学」にとっては、いわば展開期、あるいは「祭りのあと」のような時期であり、1960年代から70年代にかけて抬頭した生成意味論や語用論、認知言語学、社会言語学、談話分析、あるいはこの時期に再興を遂げた言語人類学や機能文法などの学流がそれぞれの展開を遂げていくなか、かつての生成文法のような求心性のある中心を失った言語研究の諸流派が、様々な意匠、相対主義的なフレームの

なかで隣接分野として、いわば予定調和的に共存するといった模様であった。つまりは、専門化、蛸壺化していく関心と党派的利害、「インターフェイス」などを掲げる表層的な擬似的「横断」の試みなどが、時代精神となった時期、ウェーバーやニーチェに倣って言うならば、精神なき専門化と魂なき享樂のエートスが支配的となった時代に一人の言語学徒となった私にとっては、構造言語学とその批判がもっていた興奮に満ちた時代は、それが残した文献や、それを経験した先達と交わることを通して、その残響を感じることによってしか経験しえないものとなっていたのだと思う。

振り返れば、元々私が言語学を志した背景には、少年時代の私にとっては憧れであったロシア・アヴァンギャルドの理論家、ローマン・ヤコブソンの存在があり、シカゴ大学へと進んだ理由も、そこにヤコブソンの弟子であった言語人類学者たちがいることにあった。その一人であったシルヴァスティンに言語人類学や記号人類学、言語学、社会科学を学んだ私にとって、日本で、ヤコブソンに体现されているような学問、ヤコブソンの「言語学」を、完全に周囲から孤立することなく行い続けることができる研究環境を見出せるかどうかという問題は、かなり本質的な事柄に思われたと記憶している。

ヤコブソンの精神を表わす言辞の一つに、「私は言語学者である。言語学者である限り、言語に関わるすべてのものを関心事とする責務を私はもつ」という旨のものがあつた、これによってヤコブソンは方言学、民俗学、物語論、詩学、文法論、脳科学、数学、記号論、翻訳学などを一気に結びつける一つの学を打ち立てることになったのだが、直観的な洞察と浩瀚な学識、体系的な理論化を特徴とするこの学が、「専門性」という名の制度的な縄張りや党派性の論理が幅を利かす環境において、たやすく現実化することなどありえない。事実、ハレやチョムスキーなど、ヤコブソンの数多の「弟子」や後進たちが指導的地位にあつたアメリカ言語学においてさえ、上で示唆したような専門化と形式化した相対主義の制度的枠組みが支配的なものとなつていたことを私は体験している。鮮明な洞察と広範な関心・知識によって、水平に連なる多くの岩窟の偶像を大胆に揺さぶるような身振りに従事することは、制度的な報酬よりも、悦ばしき学問の愉樂を優先する、本質的に夢想的な行為として登記されよう。20世紀末から21世紀の初頭にかけて、ヤコブソンの精神を生きることは、それなりの代償を払う営為ではある。

学会や研究会、そして高等教育研究機関で人一倍、大きな貢献を果たし、とくに立教・異文化コミュニケーション研究科に関しては、その運営の屋台骨をほとんどお一人で支える活躍、また、多くの院生に対する熱意に満ちた研究指導、それらのお仕事に加え、学業の領域においても、構造言語学を始めとして、詩的言語論、語用論、認知言語学、記号論、言語教育学などを、群羊を離れ、たった一人で堂々と一気に横断しようとする試み、そのような平賀先生の長年に亘る精力的な営みは、とくに日本においては、極めて例外的な、個的な、稀有なものである。疑いようもなく、このような営為は簡単に成し遂げられるものではない。人並み外れた情熱と体力、強い使命感と不動の勇氣などをもってのみ、領域を超えた学問的関心と専門的探究とは一体となり、そのようにしてのみ、ヤコブソンの精神は形象化される。

確かに、その社交的で快活なお人柄もあり、東京首都圏やその他の日本の諸地域においてだけでなく米英や欧州にも自らの研究者網をもち、自身と共鳴する学者たちと連携することで日本的な制度の閉塞を超え、学知の自由な交流に身を任せることが、平賀先生がこの地に生活の基盤をもちつつも、ヤコブソンの言語学の伝統を生きること、身をもって指し示すことが可能となつた一因ではあつたのだろう。

しかしながら、おそらくその奥底、ヤコブソンの学究が日本的アカデミアというコンテク

ストのなかでこのような一個の稀有な学者によって継承されることを可能にした諸因のうちで、もっとも根幹的であると思えるのは、平賀正子という人間の基軸にある誠実さ、学問の要請への忠誠心、学者としての、大学人としての誠意であると言えるのではないか。実際の学問がどのような社会的制約のなかに措かれていても、それにも拘わらず、学問がめざすべき理念としての真実への忠誠心を保つこと、いかに自分に有利になろうとも策を弄することを決してせず、場当たりのなげな詭弁など一切用いず、だがその一方、愚かな教条主義、独りよがりの頑迷さ、大義の名の下に自己利益を最大化しようとする末人たちの醜悪で自己中心的な正義心に墮すことも断固として拒む精神、気骨に満ちた健全なプラグマティズム、現実主義的でありつつ冷笑や悲観や術策に陥らない一種、デューイ的な人生・生命への肯定的態度、この社会の現実から目を逸らすことなく人間性に対する信頼を維持し続けること、愛と熱意、学問への、そして教育への愛と熱意こそが、このような環境において、平賀先生がヤコブソンの言語学を踏襲することを可能にしたものであり、それこそが、平賀先生が私に教えてくれたもの、贈与であったのだと思う。

「生き方の形」、生命体としての学問が、冬の時代に陥った言語学や、大学全体の組織的な有り様を超えて、次の世代のなかに引き継がれていくこと、暗く、しかし平板な「疑い」の時代を指し示すすべての悲しい指標にも拘わらず、パースの夢見た愛の進化と共に、学知を司る共同体が、その使命を忘れず、利己的関心、欺瞞、偽りの党派性を超えた（スコラ的な意味での）現実的な理念、美と善と真の織り成すパースの宇宙、第一性と第二性と第三性が住まう学問の宇宙論的地平へと——すべてにも拘わらず——志向し続けること、向かおうとし続けること、記号の無限連鎖が示す大いなる伽藍のごとき規範体系の前に大学人としての我らの今の卑小な有り様を恥じ入ること、それが、この学者の示した徳、私たちへの愛が指し示す実践 / プラグマの地平なのだと思ふ。

単に年長者であるということではなく、自然と、心から、自ずから先達として敬慕しうる学問の徒と共に長い時間を過ごせた喜び、ヤコブソンとパースの精神に忠実な道を歩もうとする人が、今ここに、眼前にいるという恩恵に直截に浴することができたのは、私がこの人生で享受しえた一つの天恵であったとさえいえる。

信仰の組織、あるいは不信仰の組織ではなく、パースやデューイと共に、学問を信じることを選んだ者、その先達としての平賀正子先生に対し、ここに深く首を垂れ、今は、研究科を去り行くこの先達の大きな影に、静かに心を馳せ続けたい。